



地方のソフトウェア産業の展望 — AIがもたらす「地方の時代」への転換 —

一般社団法人ソフトウェア協会 副会長／地域AIデジタル推進委員会 委員長／
ネクストウェア株式会社 代表取締役社長 豊田 崇克

豊田崇克（とよだ たかよし）●1998年よりネクストウェア株式会社代表取締役社長。日本パーソナルコンピュータソフトウェア協会（現・一般社団法人ソフトウェア協会）の理事、常任理事を経て、2012年から副会長を務める。2018年より地域IoT推進委員会（現・地域AIデジタル推進委員会）委員長として、地域のデジタル化推進にも携わっている。

私は現在、一般社団法人ソフトウェア協会（以下、SAJ）の副会長を拝命し、当協会では地域AIデジタル推進委員会の委員長を務めております。「地方のソフトウェア産業の展望」という大きなテーマをいただき、身の引き締まる思いで筆を執らせていただきました。

今、私たちソフトウェア産業を取り巻く環境は、AIの急速な進展によって大きく姿を変えつつあります。とりわけ「地方」と「ソフトウェア産業」の関係性は、この数年で明らかに変化してきていると実感しています。本稿では、この変化を3つの視点から整理し、地方のソフトウェア産業がこれからどこへ向かうのかについて、私見を交えながらお伝えしたいと思います。

1. AIによって変わる「地方」と「ソフトウェア産業」

2023年頃、IT業界やクラウド社会の進展は「首都圏一極集中」を加速させると言われていました。クラウドの利便性は、どこからでも同じサービスにアクセスできることを意味する一方で、実際にはビジネスの重心はむしろ東京により強く集約されていくだろうという見方が、当時は支配的だったのです。

ところが2025年以降、生成AI、そしてエージェントAIの急速な広がりによって、この予測は様相を変えつつあります。ソフトウェア開発そのものにおける「場所」の意味が、根本から変化してきているのです。

かつて、開発拠点には優秀なエンジニアが集積し、発注元である大手SIerや顧客企業に近い立地であることが求められてきました。しかし今、情報収集やコミュニケーションのオンライン化が一段と進み、開発の現場が東京にある必然性そのものが薄れています。さらにAIの登場によって、少人数のチームでも高度な業務を担えるようになったことは、地方企業にとって特に大きな意味を持ちます。人材確保が難しい地方にあっても、AIを使いこなせば、以前は大人数を要した業務を数人で担えるようになってきているのです。

私が委員長を務める地域AIデジタル推進委員会の活動を通じて、この流れは肌で感じています。SAJは

2026年6月現在、会員企業・団体が803社、個人会員20名が所属する大規模な協会となりましたが、ここ最近では地方の企業の入会が目立って増加する一方、首都圏の受託企業では退会する動きも見られます。加えて、地方自治体の会員増加や、地域の高等専門学校をはじめとする学校会員の入会も見られます。ソフトウェア業界における「地方シフト」は着実に、そして確実に進行しているのではないかと私は見ています。こうした変化を踏まえると、私たちSAJの役割そのものも、単なるソフトウェアプロダクトベンダーの集まりから、地方・地域を含むデジタル社会全体を支える「情報インフラ」へと、期待の質が変わりつつあるように思われます。

こうした動きを裏付けるように、IPA（情報処理推進機構）が公表した「DX動向2026」の調査結果でも、AIを導入または試験的に利用している企業の割合は58.0%まで増加しています。これはもはや一部の先進企業だけの話ではなく、業種・地域を問わず、AI活用が現在進行形で日本企業全体に広がっていることを示すデータだと言えるでしょう。

こうした変化を総合すると、地方企業にとって長年の悩みの種であった「距離」のハンディキャップは、確実に小さくなってきています。首都圏の企業と対等に情報を得て、対等にコミュニケーションを取り、対等に開発を行える環境が、AIとクラウドによって整いつつあるのです。次ページの図解①は、この変化の構図を整理したものです。

2. 地方企業にとって「AI」は何を変えるのか

このAIの浸透は、単に「仕事が楽になる」「効率化できる」という話にとどまりません。私が本当に注目しているのは、AIが地方企業にとっての「価値の源泉」そのものを変えつつあるという点です。

私がソフトウェア会社に入社した当時の入社試験は、「1X = 5、X = ?」といった、いわばブラックボックスを解き明かす問題でした。システムに置き換えれば、アルゴリズムを考えることこそが仕事であり、インプット

図解
1

「東京一極集中」から「地域分散」へ

～AI・クラウドが変える地方の環境～



とアウトプットは与えられていて、その途中経過をどう組み立てるか、すなわちプログラミングすることが、エンジニアの本分だったのです。

ところが、AI 活用の時代になると、このアルゴリズムを考える部分そのものを AI が担うようになりました。私たち人間に求められるのは、むしろ「何を考えさせるか」「何を入力するか」を考えることです。かつてのプログラマーは、今やデータインプッターへと役割を変え

つつあります。まるで当時の私と現在のエンジニアとでは、立場が完全に逆転してしまったかのようです。

しかし私は、このデータインプッターという役割の変化を、むしろ非常に興味深く、可能性に満ちたものだと捉えています。さまざまな場所からデータになりそうなものを発掘し、それを AI に考えさせる。その結果として大きな評価や価値が生まれていく。これはまさに「宝探し」に似ていると、私は感じています。

そしてこの「宝探し」という観点に立ったとき、地方には、実はまだ誰も価値化していない「宝」が数多く眠っているのではないのでしょうか。地方企業が長年培ってきた現場のノウハウや、地域固有のデータそのものが、AI 時代には大きな価値を持つようになるのです。例えば、次のようなものが挙げられます。

- 地域の製造業が持つ独自のノウハウ
- 農業・漁業の現場で蓄積された経験値
- 観光地における顧客データ
- 自治体が保有する地域データ
- 医療・介護・福祉の現場情報
- 地域交通に関するデータ
- 地域企業ならではの業務ノウハウ

これまで、こうした情報や知恵の多くは、特定の熟練者の頭の中や紙の記録、あるいは各企業の中に閉じたまま眠っていました。「東京に行かなければ価値が認められない」という感覚を持たれていた方も、地方には少なくなかったのではないかと思います。しかし、AI とクラウドを組み合わせることで、東京に行かなくとも、地方に存在するデータや知識そのものを AI によって価値

Better begins here.

あたりまえの毎日が、よりよいものであるように。

三菱電機は世の中を支え続け、変え続ける。

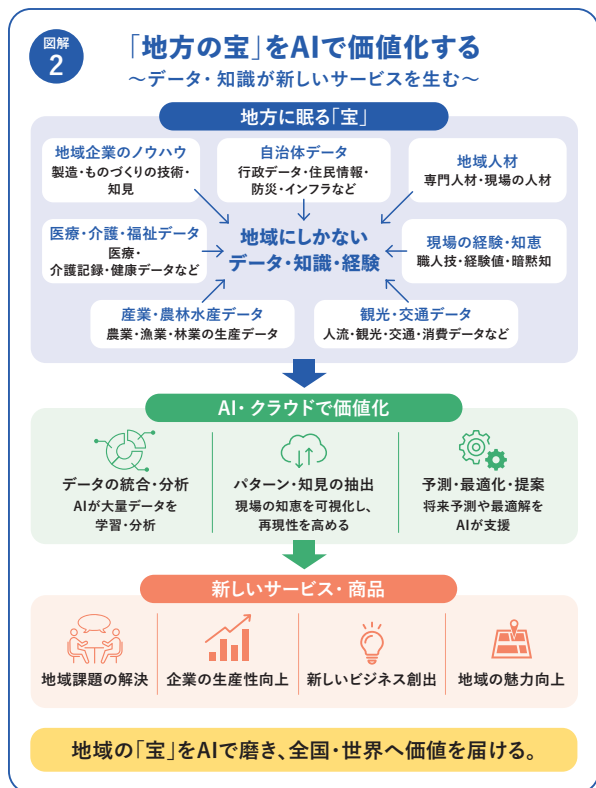
社会をもっとポジティブに、心をもっとポジティブに。

もっといい毎日を、ここから。

**MITSUBISHI
ELECTRIC**
Changes for the Better

化できる時代が到来しています。

実際、IPA の調査でも、AI の活用領域は単なる文書作成や情報収集にとどまらず、意思決定支援や、製品・サービスそのものの高度化へと広がりを見せているとされています。地方に眠るデータや知識を掘り起こし、AI・クラウドを通じて価値化し、新しいサービスや商品として世に出していく——この一連の流れを整理したのが図解②です。



3. 地方から「全国」を狙える時代へ

これまでの地方ソフトウェア企業にとって、事業の生命線は「東京から仕事を取る」ことでした。首都圏の大手 SIer から案件を受託し、開発・保守を行う——このモデルは長らく、地方企業にとって最も現実的な生き残り方でした。

しかし、AI とクラウドの発展によって、まったく新しい選択肢が生まれています。それは、「地方の課題を起点に、自分たちでサービスをつくり、全国に売る」というモデルです。

先日、私は SAJ の地域 AI デジタル推進委員会のセミナーに、地域の担当理事とともに参加しました。かつて、地方のソフトウェア・情報産業の課題として最も大きかったのは、開発における情報格差でした。多種多様なプロダクト情報や SaaS プロダクトの情報を入手することこそが、地域の SAJ 参加企業にとっての主たる目的だったのです。

ところが現在、地域の SAJ 参加企業の目的は、もちろん情報入手も引き続き重要である一方、それ以上に「人と人とのコミュニケーション」「人的なつながり」へと動機が変化してきているように感じます。このニーズの変化は象徴的です。今までのように首都圏の大手 SI ベンダーから仕事を受託するだけでなく、自分たちでマーケティングを行い、地域のユーザーを開拓し、地方・地域から全国へと展開していく——それが、AI の発展によって現実的な選択肢になってきているのです。

この変化を後押ししているのが、データセンターの地方分散という政策的な動きです。経済産業省は、国内の



データセンターの実に8割以上が東京圏・大阪圏に集中している現状を課題として捉え、自然災害へのレジリエンス強化や、地方におけるデジタルサービスの高度化に必要な計算資源の確保などの観点から、東京圏・大阪圏を補完・代替する中核データセンター拠点を地方に整備する方向性を示しています。北海道苫小牧市における大規模データセンター整備のように、地方における計算基盤の強化は、すでに具体的に動き始めています。つまり、

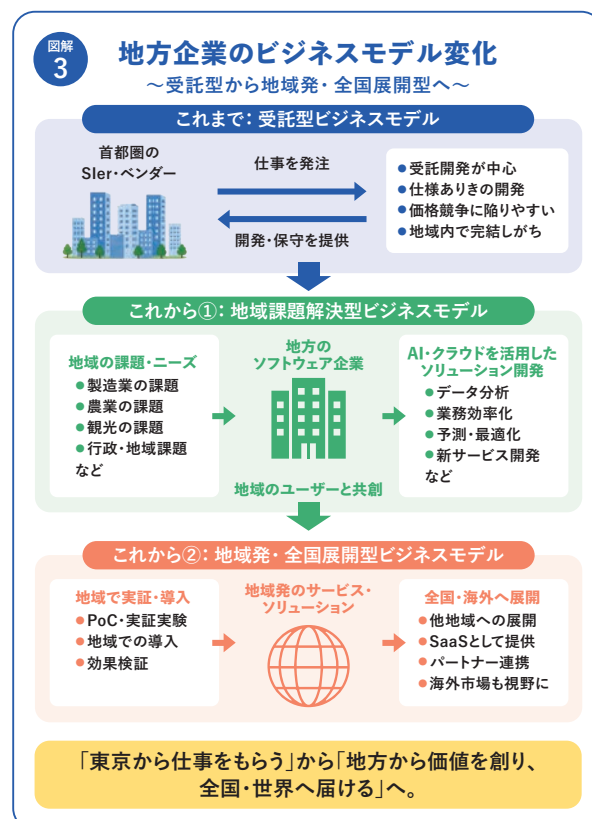
AI+クラウド+データセンター+地域データ+地域人材

——これらが組み合わさることによって、地方のデジタル産業を取り巻く環境そのものが、根本から変わっていきこうとしているのです。これは単なる技術トレンドという以上に、地方の産業構造そのものを塗り替えるインパクトを持つ変化だと、私は考えています。図解③は、この受託型から地域発・全国展開型へのビジネスモデルの転換を示したものです。

結論として申し上げれば、クラウド社会の推進によって首都圏一極集中が進むと言われていた時代から一転、AI社会への急速な発展によって、地方と首都圏との情報格差は着実に縮まりつつあります。また、会社経営そのものも、AIが事務方の人材不足を補うことで、地方でも起業のハードルが下がってきています。今後、ソフトウェア企業・産業は、地方・地域から躍進していく——私はそう、希望も込めて確信しています。

最後に、この変化を象徴する言葉として、私は改めて「宝探し」というキーワードに立ち返りたいと思います。

地方には、まだまだ大きな宝の山がたくさんあります。これからは、まさに「地方の時代」だと私は思うのです。「地方には人がいない」のではありません。「まだAIによって価値化されていない、人・データ・知識がある」——そう捉え直したとき、地方の可能性は、これまでとは比べものにならないほど大きく広がって見えてくるはずです。



一般社団法人ソフトウェア協会 副会長／地域AIデジタル推進委員会 委員長 豊田崇克

BluStellar

未来へ導く、光となる。

たくさんの選択がある。
そこに困難があるからこそ希望もある。
だから迷い、だから挑戦する。

私たちは、革新的な技術と、
それを支えてきた人々の経験や知識で、
あなたを導いていく。

NEC \Orchestrating a brighter world